

論文の内容の要旨

氏名：鈴木 雄 大

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：他者からの視点取得の表明に関する心理学的検討

他者の視点に立って世界を考えることを、視点取得という (Galinsky et al., 2008)。ある人が他者の視点を取得するとき、そこには視点取得する人と視点取得される人が存在することになる。すなわち、視点取得とは、する人とされる人の双方によって成立する現象である。視点取得されることに注目した研究では、主に被視点取得の知覚 (Perceived Perspective-Taking) に注目した検討が行われている。被視点取得の知覚とは、他者に視点取得されたと思うこと (believing that another individual is taking one's perspective) をさす (Goldstein et al., 2014)。

しかし、被視点取得の知覚に関する研究には、いくつかの問題があった。第一に、Goldstein et al. (2014) の追試を行った研究が見当たらないことである。第二に、感情的視点取得 (i. e., 他者の視点に立って、その他者の感情を想像すること) と認知的視点取得 (i. e., 他者の視点に立って、その他者の感情を考えすること) を区別した検討がなされていないことである。それぞれの視点取得についての他者からの表明は、異なる効果をもつ可能性が指摘された。第三に、被視点取得の知覚および他者の視点取得能力の評価を説明する要因の実証的検討がなされていないことである。この点について明らかにすることで、他者からの視点取得の表明がもつ効果をより詳細に説明できる可能性が指摘された。

そこで、博士論文では、上記で提起した問題を想定し、8つの研究によって他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について検討した。まず、Goldstein et al. (2014) の追試および問題点の解決を目的として、3つの研究を行った(第二章)。次に、第二章の研究から得られた知見をもとに、2つの研究によって感情的視点取得と認知的視点取得を区別して検討した(第三章)。そして、博士論文のそれまでの研究から得られたモデルの修正および発展を目的として、3つの研究を行った(第四章)。

第二章では、3つの研究を行い、Goldstein et al. (2014) が示した他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果、およびその効果のプロセスについて検討および問題点の解決を試みた。研究 1 では、Goldstein et al. (2014) が示した、他者からの視点取得の表明の効果および、その効果のプロセスについて検討した。具体的には、首都圏の大学に通う学生 54 名を対象に、2(視点取得の表明：表明あり条件 vs 表明なし条件) × 2(感情と思考の伝達：伝達あり条件 vs 伝達なし条件) の二要因参加者間計画による実験を行った。参加者は、自身の経験についてエッセイを記述し、そしてそれを読んだ架空の他者が参加者に対して視点取得したかどうかをフィードバックされた。このフィードバックによって、視点取得の表明が操作された。その結果、Goldstein et al. (2014) と同様に、他者からの視点取得の表明を受けることが、被共感の知覚、自他の重なり知覚、そして他者へのポジティブな評価を促進することが示唆された。また、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについては、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚を促進し、それによって自他の重なり、および他者へのポジティブな態度が順に影響されるモデルが支持された。これは、Goldstein et al. (2014) とは異なる結果であった。研究 2 では、被共感の知覚が自他の重なり知覚を促進するという現象が存在するのかどうかを確認するため、過去の被共感経験における内的な変化を問う質問紙調査を行った。その結果、被共感の知覚によって、自他の重なり知覚が促進されることが示された。そして研究 3 では、研究 1 の問題点および研究 2 で解決できなかった問題に注目し、その解決を試みた。すなわち、(a) 研究 1 の問題点として、被共感の知覚の測定が 1 項目で行われていたことを指摘し、被共感の知覚を測定するための妥当な尺度の作成を行った。同時に、(b) 研究 2 で解決できなかった点として、被共感の知覚が自他の重なり知覚を促進する因果関係について、実験による検討を行った。実験は、148 名を対象とした 1 要因参加者間計画であった。その結果、上記(a)について、5 項目からなる被共感の知覚尺度が作成された。また、上記(b)について、他者からの共感的反応を受けた人は、共感的反応を受けなかった人よりも、自他の重なりを強く知覚することが示唆された。

第三章では、2つの研究によって、他者からの感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果を検討した(研究 4・5)。研究 4 では、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明を区別し、それぞれが被共感の知覚に及ぼす影響を検討した。具体的には、2(感

情的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし) × 2(認知的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)の参加者間計画による実験を行った。その結果、感情的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせることが示唆されたが、認知的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせるとは言えなかった。この結果から、研究 5 以降では感情的視点取得の表明に注目した。研究 5 では、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なる知覚に及ぼす効果、およびその効果のプロセスについて検討した。その結果、他者からの感情的視点取得の表明は、被共感の知覚および自他の重なる知覚を促進することが示唆された。さらに、他者からの感情的視点取得の表明が自他の重なる知覚に及ぼす効果は、被共感の知覚に媒介されるモデルが支持された。この結果は博士論文の研究 1 で得られた結果を支持するものであった。

第四章では、3 つの研究によって(研究 6—8)、他者からの感情的視点取得の表明の効果、およびその効果のプロセスについて、3 つの変数に注目した検討を行った。すなわち、他者の感情的視点取得能力の評価、被感情的視点取得の知覚、および人一般の感情的視点取得能力信念であった。まず、研究 6 では、人は一般的に他者の視点に立って感情を想像することができると思えることを人一般の感情的視点取得能力信念と定義し、その程度を測定する尺度を作成した。研究参加者は 153 名であった。その結果、13 項目からなる人一般の感情的視点取得能力信念尺度(BAPTAS)が作成された。作成された尺度について、4 つの既存尺度との関連を検討したところ、すべての既存尺度との間に予測通りの関連が示された。 α 係数および ω 係数も十分に高い値を示していたことから、BAPTASは十分な妥当性と信頼性を備えていると考えられた。

研究 7 では、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて、他者の感情的視点取得能力の評価、被感情的視点取得の知覚、および人一般の感情的視点取得能力信念に注目して検討した。具体的には、54 名を対象に、感情的視点取得の表明(表明あり vs 表明なし)を操作した一要因二水準の参加者間計画による実験を行った。その結果、3 つのことが明らかになった。第一に、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念によって説明されることが示された。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明を受けた表明あり群は、客観的視点に立ったと表明された表明なし群と比べて、他者の感情的視点取得能力は高く評価されていた。また、表明なし群においては、人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価することが示された。第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価によって説明されることが示された。具体的には、表明あり群は、表明なし群に比べて、他者からの感情的視点取得を強く知覚していた。また、表明なし群においては、他者の感情的視点取得能力を高く評価しているほど、その他者からの感情的視点取得を強く知覚することが示された。第三に、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについて、次のモデルが得られた。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用効果によって被感情的視点取得の知覚が説明され、それによって被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度が直線的に関連するモデルであった(Figure 1 参照)。

研究 8 では、113 名を対象に、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて、他者が類似経験を有するかどうかをくわえて検討した。すなわち、研究 7 で行った実験に、他者がどのような人物か(i. e., 類似経験を有するかどうか)のフィードバックを追加した。その結果、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明、他者の類似経験の有無、および人一般の感情的視点取得能力信念それぞれから影響されることが示された。具体的には、(a)感情的視点取得の表明があると、それが無い場合よりも、(b)類似経験を持つ他者は、類似経験のない他者よりも、そして(c)人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、他者の感情的視点取得能力が高く評価されることが示された。また、被感情的視点取得の知覚を説明する要因、および他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについては、研究 7 と同様の結果が支持された(Figure 2 参照)。

第五章では、博士論文で行った 8 つの研究結果についてまとめ、総合考察を行った。そして、博士論文の意義として、(a)Goldstein et al. (2014)の結果は再現されるかどうかを検討することからはじめ、体系的に他者からの視点取得の表明の効果を検討できたこと、(b)他者からの視点取得の表明を受けること、被視点取得の知覚が生じることを区別してモデルを提案できたこと、(c)他者からの視点取得の表明がもつ効果について、感情的視点取得と認知的視点取得を区別した知見が得られたこと、および(d)実際の 2 者間相互作用における視点取得の働きについて示唆を得られたことが指摘された。最後に、博士論文の限界点および展望について考察した。

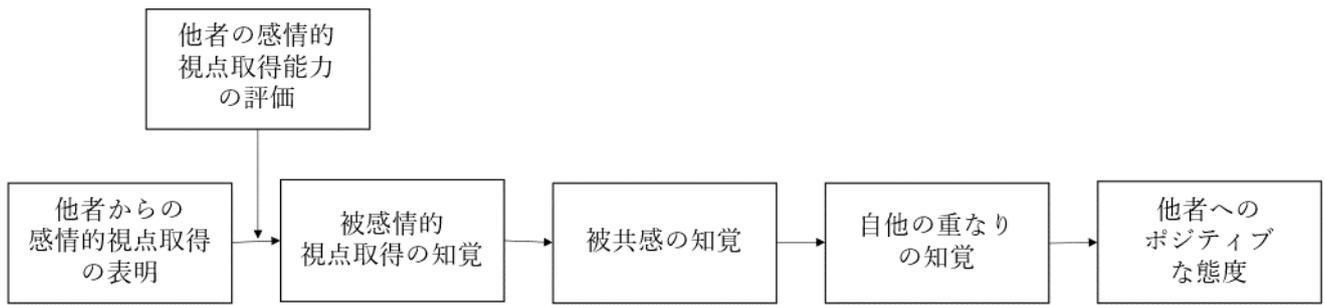
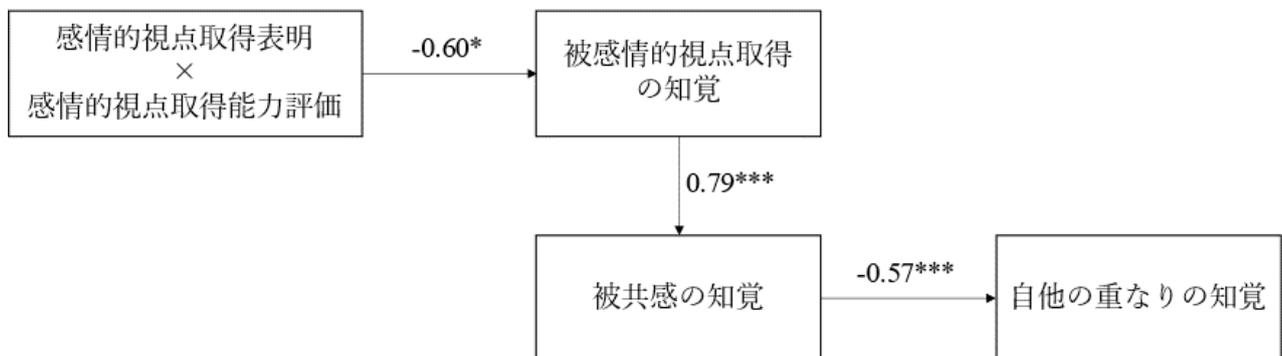


Figure 1 他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果についての概念モデル(研究7)。



Note: $\chi^2(3) = 0.53, p = .91$; CFI = 1.00, RESEA = 0.00, SRMR = 0.01

* $p < .05$, *** $p < .001$

Figure 2 他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスを検討したパス解析の結果(研究8)。